トーマス・マンと神話的なもの

―『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』―

ドイツ語教室　三　枝　圭　作

1

トーマス・マンが『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』(以下『クルル』と略す) を書き始めたのは1909年のことであるが，書いているうちに別の構想が浮かんできたために，1911年に執筆は中止された。『クルル』の執筆が本格的に再開されたのは40年後の1951年になってからであった。この年の秋，マンは仕事を再開して続編の中心となる「クックック対話」を書き始めるが，結局完成するに至らず，この断片が現在の形で上梓されたのは1954年である。中断中，作者によってときに仕事の再開や，この詐欺師小説の神話的なものへの変質がほのめかされているが，作者はその際休止中に書かれた大作『ヨゼフとその兄弟たち』(以下『ヨゼフ』と略す) の趣きが『クルル』に加えられることを示唆している。

マンは仕事再開後，1951年11月 6 日付のヨーナス・レッサーあての手紙で次のように述べている。

> あなたがさしあたって『クルル』について言わなければならないことを，ヨゼフに関するあなたの章に組み入れるのは，きっと正しいです。後者 (ヨゼフ) は前者 (『クルル』) より前に存在していたのですが，いまやあのヨゼフは生きかえっております。(1) (括弧内は筆者)

著者自ら『ヨゼフ』による『クルル』の変容を伝えているのである。また，『クルル』断片が刊行されたすぐあと，1954年10月17日付の手紙で，マンはカール・ケレーニイにあてて次のように書いている。

> 40年前にこの仕事を始めたとき，私はヘルメストリスメギストス風の長編小説を書くことは全く考えておりませんでした。…ようやく続きを書いているときに，『ヨゼフ』の接近によって，ある種の連想が滑り込んできました。そしてこの神の名前が浮び上がりました。(2)

上記の引用では，『クルル』へのヘルメスの登場が指摘されている。これらの手紙でわかるように，『クルル』においては，まず『ヨゼフ』が復活し，続いてヘルメスのモティーフがとり入れられるのである。

2

ところで，論をすすめる前に，ここでトーマス・マンの作品に見られる「旅のモティーフ」，もしくは「出発のモティーフ」について触れておきたい。これについてはハンス・ヴィースリングが見事に論じている通りであるが，[3] マンの主人公たちはよく運命にかかわる極めて重大な旅をする。彼らはそれによって自らの人生を変えてしまうのだ。かの文士グスターフ・フォン・アシェンバハは「何か外国風でその場かぎりのもの」(Ⅷ-457)[4] を求めて旅に出る。単純な青年ハンス・カストルプは，「故郷ハンブルクを発って，グラウビュンデン州ダヴォス＝プラッツへ向った。」(Ⅲ-11) ひとり旅の男アルブレヒト・ファン・デル・クヴァーレンは，名も知らぬ町へ「ひどく不思議な」(Ⅷ-152) 旅をする。未亡人ロザーリエ・フォン・テュムラーは，死の直前ホルターホーフ離宮への死の旅／愛の旅を試みる。アシェンバハはこの未亡人と同様にアケロンを渡り，[5] ハンスは「魔の山」でタナトスとエロスを体験する。[6] アルブレヒトの旅はカロンに出会う旅[7] だったのであり，ロザーリエの旅は途中で「黒い白鳥」を見る旅だったのである。

一方，ヨゼフはエジプトへ赴いた。しかし，彼はここ死の国エジプトで艱難に耐え，逆に童話的な上昇を果たす。本論の主人公フェーリクス・クルルはポルトガルに出発する。「列車はパリを6時に離れていた。夕闇が迫った。」(Ⅶ-529) こうしてフェーリクスのオリュンポスとハディスへの旅[8] が始まるのだが，彼は現代のリスボンで神話の世界を体験することになるのである。

3

冒頭で触れたように，長編『クルル』は，まず大作『ヨゼフ』によって変質するのであるが，両作品の主人公たちのあいだにかなりの対応が見られるのはそのことを示している。以下，それらのいくつかを挙げてみよう。愉快な詐欺師フェーリクス・クルルは，ヨゼフの父ヤコブに類似している。ヤコブが自分の兄であるエサウに対してはたらいた喜劇的「詐欺」(Ⅳ-201) については，「ヤコブ物語」の第4章で「大がかりな茶番劇」(Ⅳ-201) なる標題のもとに物語られている通りであるが，この標題はヤコブへの非難というよりは，だまされたエサウへの嘲笑を表わしている。また，同じく第7章の「まだら羊」(Ⅳ-349) の標題であつかわれている，ヤコブによる自分の伯父ラバンに対する瞞着は，「機智に富んだ羊飼いの発明にかかる策略の傑作」(Ⅳ-353) であるとされ，当のヤコブに名誉さえもたらすのである。

更に，ヤコブの息子ヨゼフに至っても，その若々しい美しさはフェーリクスと共通している。美少年ヨゼフに関する次の箇所は，そのままフェーリクスにもあてはまる。

> 若さには愛嬌があるのだが，愛嬌とは美の一形相で，その性質上，男性的なものと女性的なものとの中間にたゆたっている。…ラケルの息子がそうであった，だから，彼は人間のうちで最も美しい人間であった，と言われているのである。(Ⅳ-349)

このように風貌にすぐれたヨゼフとフェーリクスは，他方で，夢想家であった。彼らは早くからそれぞれの生れよりはるかに高い社会的地位を夢見る。お互いの歩みには明暗のちがいはあるものの，いずれの夢も実現される。両者はめでたく上昇志向を全うする。この成功に際して大きな力を発揮

したのが，彼らの弁舌の才であったことも疑いない。ヨゼフはそれによって，他の多くの兄弟たちの反感をかうが，エジプトでは，そのおかげでファラオと侍臣ポティファルの信頼を得るに至るのである。ファラオによって，エジプトの穀倉地帯の主に任ぜられたヨゼフは，豊かな地域からは，ずるいやり方で搾取しながらも，貧しい人民にはひそかに施しを与える。このようなぬけめのなさも，ヨゼフとフェーリクスに目立つ特徴のひとつであろう。

> ヨゼフはおそらく最初から，この神話的な人気を獲得しようと狙っており，事実また獲得したのだが，この人気の因はなんといっても，ヨゼフのとった措置が虹のように多彩な混ざり合い，眼でもって哄笑するといった意味の二重性を持っていたことにある。こうしてその措置は魔術師のような機智をもって全く個性的にさまざまな目的や目標をひとつに結び合せたのである。(V-1758)

最後に，両長編小説の主な女性像に視点を移してみよう。『ヨゼフ』において，ポティファルの妻が美しいヘブライ人の下男ヨゼフを追いかけまわすように，『クルル』にあっても，美青年フェーリクスは，ディアン・フィリベールなる女流作家ウプレ夫人に誘惑される。彼女たちはともに相手の青年より年上で，ともに彼らより社会的地位が高く，しかも倒錯的である。こう見ただけでも両女主人公の類似は明らかである。

但し，ここでわれわれは，『ヨゼフ』と『クルル』における大きな相違点を見逃すわけにはいかない。つまり，それは青年フェーリクス・クルルがいわゆる "ein keuscher Joseph"「純潔なヨゼフ」でないということであるが，[9] 滑稽な詐欺師小説にあってはそれも当然のことではなかろうか。

4

前章で『クルル』への『ヨゼフ』の影響，それに基づいて顕著になる主人公たち，特にフェーリクスとヨゼフとの類似点について述べたが，『クルル』の主人公フェーリクスに，ヨゼフのみならず，更にヘルメスが導入されることによって，この作品はいっそうゆたかに開花する。トーマス・マンのヘルメス＝モティーフは，その歴史をたどればかの『ヴェニスに死す』まで溯る。ポーランドの美少年タドゥツィオの姿，つまり「塑像と鏡」(Ⅷ-490) は，後の『クルル』におけるヘルメスに，Totenführerたるアッシェンバハは，『クルル』におけるハデスに通じるものがあるが，彼らは未だこれらギリシアの神々の本領を発揮するに至っていない。続いて，『魔の山』をさまよっているヘルメスは，ゼッテムブリーニによれば，「文字の発明者」，「あらゆる精神活動の奨励者」(Ⅲ-723) としての人文主義の神であり，ナフタによれば，「死と死者との神」(Ⅲ-723) であった。

ハンス・ヴィースリングは『ヨゼフ』においてもヘルメスの姿を認めている。彼によれば，「若いヨゼフ」の第5章，「野の男」(Ⅳ-535) の項で，野をさまよい歩くヨゼフの前に突如出現したベドウィンの少年は，道の神ヘルメスに他ならない。ヘルメスは『ヨゼフ』の別の場所でも現れる。ヨゼフは後年，ファラオから異国の神についての話を聞く機会があるが，われわれは王の語るこの神にヘルメスの面影を見てとることができる。楽器のラウテを示しながら，ファラオはヨゼフに言う。

> 見受けるところお前はトトの諸芸に通じた書記であるらしい。それは，下界の深みの拘束的な

典型が実現する場としての自我の尊厳と関係のあることなのだろう。…しかしこの楽器は，単に優雅と善意とのしるしであるばかりでなく，それとは別のもののしるし，つまり，ある異国の神のずるさを表わすしるしなのだ。その神はあの鴉の頭をした神の弟であるか，あるいは鴉頭の神の別の現われであるが，とにかく，その神が子供のときにある動物に出会って作ったのがこの楽器なのだ。」（V-1424）（傍点著者）

上記引用文中の傍点の部分を含めて，これに続くファラオの長い説明には，「抜け目のない子供神」，「いたずら」，「いたずらな神」，「盗みをはたらくこの子供」（V-1425）等の言葉が散見されるが，これらのいずれもヘルメスの姿を彷彿とさせながら，すべては同時に，ヘルメスとしてのヨゼフ自身を暗示しているかのように見える。ファラオがここでほのめかしているヘルメス，つまりゼウスの息子が，アルカディアはキュレーネ山中の洞穴で生れ，生れ落ちるとから悪狡こく，生れたばかりの赤ん坊にして，アポロンの牛の群れを盗むなど神々をはらはらさせながら，名誉ある盗賊の守り神になることは周知の通りである。このような神ヘルメスとヨゼフとの関係については，作中で次のように語られている。

この身軽く機敏な，気持のよい調停者としての仲介者の精神は，ヨゼフが客となった黒土の国においてはまだしかるべき名前を持った神格となっていなかった。強いて言えば，書記であり死者の案内者であるトト，さまざまな老練さを案出したトトがここに言う（ヘルメスの[10]）神格にもっとも近い存在であった。ただファラオだけは，処々方々からあらゆる神のことを伝えられていたので，よりいっそう完成した形を持ったこの神格について知識があって，ヨゼフがファラオの恩寵にあずかれたのも，主として，ファラオがヨゼフを見てあの洞穴の抜け目のない子，つまりいたずらの神の特徴を認めたという事情のおかげなのである。（V-1758）

本章では，いままでマンのヘルメス＝モティーフと考えられるものを，初期の作品にまで溯って数えあげてきたが，上の引用を見るかぎり，この時点で，作者がこのモティーフの使用を明確に意図していたとは必ずしも断定できない。フェーリクス＝ヘルメス観念連合が『クルル』の仕事再開前には存在しなかったということは多くの研究者も指摘している。[11] そうすると，これまで見てきたような，1951年以前に執筆された部分ですでに現れている悪者神ヘルメス，つまり詐欺師フェーリクス・クルルとは一体何だったのか。恐らくそれは，まだ神話小説執筆の意図のなかった作者によるヘルメスの無意識な先取りと理解してよかろう。

はっきりと名を挙げてフェーリクスにヘルメスを持ち込むのはウプレ夫人である。彼女は主人公に言う。「おお神様。お前はほんとに美しい。りんとしてやわらかな，翳（かげ）もない，惚れぼれするような胸，すんなりとのびた腕，愛らしい肋骨，ひきしまった腰，そして，ああ，ヘルメスの足…」（Ⅶ-444），更に続けて，彼が「美の立像」，「泥棒たちの神様」（Ⅶ-444）であると。マンの仕事再開後のヘルメスは，このようにはっきりとした姿になる。クックック教授はリスボンへの車中で，クルルを前に，ヘルメスにも話題を向ける。「優美な神です。…それに体格はほどよく，小さすぎもしなければ大きすぎもしないので，人間と同じ尺度で測れます。」（Ⅶ-540）その際，教授の口から「巧妙に」とか「抜け目のない」（Ⅶ-540）といった言葉もとび出す。

ヘルメスは盗人稼業の神，詐欺師・博徒の神，うそつきの神，そして美しい輝きの神であった。その美しさはプラクシテレスの作といわれる，ヘルメス神像の優雅さが示している。

彼は風のように大地や大海をわたっていき，足にはおおむね羽のはえたサンダルをはいている。彼はまた多く路傍に立っていたことから，わが国の道祖神の如く道路の神である。このように交通の神としてのヘルメスには，従って通商の神の一面がある。ヘルメスは現世の交通を守る神であるばかりでなく，眠りと夢とを司り，地下の世界とも関係を持っている。彼は死者をハデスに導くのである。

オリュンポスの青年神ヘルメスをこのように概観してみると，ヨゼフやクルルがこの神の役を演じていることは明らかであろう。彼らはヘルメスによって結びつけられている。このオリュンポスの神ヘルメスは代父として詐欺師クルルのいたずら，盗みを見守っている。(なお，クルルの代父には悪漢のピカロもいるが，ここでは触れない。) 眞の代父シンメルプレースターが目を細める少年クルルの「神々はかくもあろうかという身体つき」(Ⅶ-284) は，ゼウスの贈り物であるかのように見える。更に，クルルの眠りと夢との才能の背後には，眠りと夢とを司る神ヘルメスが浮びあがる。ヨゼフやクルルの旅の背後には，道の神・旅行の神ヘルメスが現れる。クルルはリスボンでテニス用のシューズとして「羽のはえたくつ」(Ⅶ-616) を買うが，それはヘルメスの羽のはえたサンダルに他ならない。

ヘルメスの子クルルは神秘的に出世する。彼の操作するエレベーターは彼の社会的上昇を暗示している。彼の職場セント・ジェイムズ・アンド・アルバニー・ホテルはパリの「天上への梯子街」(Ⅶ-408) という奇妙な名前の通りにあり，この名のように彼のホテルの梯子はいわば「天上」の別の一流ホテルに通じている。クルルはこの高級ホテルのテラス食堂で知り合ったヴェノスタ侯爵と役割を交換し，たくみに社会のハードルを越えて，ポルトガル王に謁見するに至るのである。

5

『クルル』小説の後半で重要な人物が登場する。それは古生物学者・リスボン博物館長のクックック教授である。フェーリクス・クルルはポルトガルへの列車のなかでこの学者と知り合う。教授のフルネームはアントニオ・ホセ・クックックというのだが，筆者がここにあえてフルネームを挙げたのは，これらの名前のひとつひとつがその神性を象徴しているからである。アントニオはカトリックの聖人アントニウスと見てよかろう。ホセ，即ちヨゼフは，キリスト教の聖母マリアと結婚している男の名前である。ちなみにクックック教授夫人は，正式にはマリア・ピア・ダ・クルースと呼ばれている。[12] 教授の姓クックックは鳥のカッコウを意味するが，この鳥はあのオオライチョウと同じく，悪魔の鳥と見なされている節がある。ゼウスはカッコウの姿に身をかえてヘラを誘惑したといわれている。

カッコウ，即ちドイツ語の Kuckuck は婉曲な表現としては悪魔の代りに用いられている。例えば，次のような慣用句がある。“hol dich der Kuckuck!”「お前なんかくたばってしまえ」，“das weiß der Kuckuck!”「そんなことを誰が知るものか」“zum Kuckuck, hör auf mit der Brüllerei!”「やいこら，どなるのをやめにせんか」，“zum Kuckuck”「畜生」，“alles ist zum Kuckuck”「すべて残らず消え失せた」。クックック教授の講義を聞きながら，フェーリクス・クルルはうっかり次のように口をすべらしてしまう。「—いやはや (zum Kuckuck) —これは失礼，悪用する気じゃありませんでした。—しかし，そういうことを考えてはいけないでしょうが—」(Ⅶ-541) (括弧内のドイツ語は筆者)。zum Kuckuck という呪いの言葉がクルルの口をついてしまったのである。しかしながら，件のクックック教授は，「星のような眼」をしていて，その話しぶりや表情の動きには「優

しくなぶるような感じ」（Ⅶ-531）があり，彼がクルルのリスボンへの旅を「現在の住民の真剣な視察」（Ⅶ-531）と呼ぶとき，彼は「子供に向って語りかけている」（Ⅶ-531）かのようで，クルルも彼の話を聞いていると，自分が子供になったように思われるのである。このように見ると，クックックは根っからの悪魔というよりも，メフィストフェレスのようないたずらの悪魔であるのかもしれない。

いずれにせよ，ケレーニイはクックック教授の本質に，カッコウの一面のみならず神ゼウスのそれを認めており，彼によれば，リスボンの場面は神話の世界に置き換えられることができる。フェーリクス・クルルが，教授の話しを聞きながら「心にひどく茫漠としたものを感じた」（Ⅶ-531）り，「とりとめのない茫漠感」（Ⅶ-533）に襲われたりするのは，クルルがすでに神話の世界に陥っていることを示しているのではなかろうか。かくして，ヘルメスとしてのクルルは，万物の父クックック＝ゼウスが君臨する現代のパンテオンで，クックック，つまりプルトンとしてのゼウスの息子となる。クックックの妻マリア・ピアは，デメーテルとしてのヘラとなり，その娘ズーズーはペルセポネとなる。クルルをめぐるこれら神々の家族は，いずれもハデスの面影をただよわせており，クルルはその冥界をさまようのである。

クルルがここで学んだことを思いつくままに列挙してみると，存在について，無について，生命について，時間について，存在の始めと終りについて，老年と若さについて，処女性と母性について，保護と破滅について，生と死について，カオスと形式について，全肯定と全否定についてなど，数えあげればきりがないほどである。クルルはこれらの問題に共感を寄せながら，クックックに導かれて宇宙に昇り，銀河系の旅をする。また，自然誌博物館の半地下では，自分の起源を求めて時代の深淵に沈み，ハデスの旅をする。彼はポルトガル国王に謁見し，神々の山オリュンポスに登る。また，牡牛を犠牲にする大衆の祭祀のなかへ降りていく。結末の神聖な結婚式では，神々の母と諸々の対立を見渡しているヘルメスとが，豊穣と美のように結びついている。[13]

6

トーマス・マンの『クルル』断片が，彼の一切の問題を含んでいる大作で，彼が生涯にわたってそれに取組んだという点において，ゲーテの『ファウスト』になぞらえることができることは言うまでもない。ところで，マンの創作活動の終りに近く，1950年代に至って，神話小説『ヨゼフ』4部作が，『クルル』小説に与えた影響には極めて大きなものがある。『クルル』への『ヨゼフ』の復活によって，文字通りマンのすべての問題がここに出そろうとともに，神話に特有の世界観が展開されるのである。現実の個別的なものや表面的なものは超越され，典型が提示される。1942年，マンは自作についての講演『ヨゼフとその兄弟たち』のなかで，この辺りの事情や自己の神話への転換について，次のように述べている。

> 年齢に応じてさまざまの傾向，要求，好尚がある。あるいはまた能力，才能がある。ある年月を閲（けみ）すると，いっさいの単なる個人的なもの，特殊的なもの，個々のケース，言葉の最も広い意味における「市民的なもの」，そういったものへ寄せる好尚が失われてしまうことは，おらく通例のことであろう。それにかわって，典型的なもの，渝（かわ）ることなく人間的なもの，常に回帰するもの，超時間的なもの，要するに神話的なものが，関心の前景にあらわれてくるのである。なんとなれば，典型的なものとは，事実，それが生の原規範，原形式であるかぎり，また

それが超時間的図式であり，過去より与えられた公式であるかぎり，神話的なものだからである。そして生は，無意識からおのが諸特質を再生しつつその過去より与えられた公式の中へ踏み込んで行くのである。たしかに，神話的・典型的なものの観方を育成せしめるものは，作家の生涯のエポックなのであって，これは当の作家の芸術的ムードの独特な昂揚であり，認識と造形の新たなる晴れやかさである。このような晴れやかさは，すでに述べたとおり，生涯の後年に留保されることを常としている。なぜならば，神話的なものは，なるほど人類の生涯においては初期の原始的な形式をあらわすものであるが，しかし個々人の生涯においては後年に成熟せる形式をあらわすものだからである。(XI-656)

マンが上で述べている「認識と造形の新たなる晴れやかさ」は『クルル』の随所で見られる通りである。この明るさはこの小説のパロディとしての性格を鮮やかに特徴づけている。ウプレ夫人は泥棒神クルルに彼女の宝石箱を盗んだことを白状されると，かえって喜び，自分の眼の前で彼に現金や宝石類を盗ませてそれをすべて彼に与える。彼女による幻想と現実とのこのように愉快な混交はその一例である。マンはまた，『リヒアルト・ヴァーグナーと「ニーベルンゲンの指輪」』と題する講演のなかで，ゲーテを引き合いにだして言う。

彼は神話でいかめしい儀式を行うのではなく，それと戯れるのであります。彼は心をこめて，親しげに神話と遊ぶのであります。きわめて小さく，はるか縁のないものに至るまで彼は自在にあつかいます。そして神話を荘重さよりは滑稽さ，いや細やかな心づかいの戯画のタッチさえある正確さで，晴れやかな，機智に富む言葉を用いて描きだしています。これは神話による慰みとでもいうべきもので，『ファウスト』全体の世界探訪的特徴にまことにぴったりしたものです。(IX-507 f)

以上のようなゲーテの神話観は，そのままマンのそれと見なしてよかろう。『クルル』はマンの「ユーモラスな神々の芝居」，「ユーモラスなパンテオン」[14]である。そして神話の登場によって押しのけられているかに見えたかつての「市民」と「芸術家」の問題は，そのパロディとしてここに再び浮び上っているのである。

注

(1) Thomas Mann: Briefe, 1948-1955. S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M. 1965, S. 228.
(2) Thomas Mann-Karl Kerényi／Gespräch in Briefen. Rhein-Verlag AG, Zürich 1960, S. 193／195.
(3) Hans Wysling: Thomas Mann heute. A. Franke AG Verlag Bern, 1976, S. 44.
(4) トーマス・マンの著作の底本としては，Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Frankfurt am Main 1974を用いた。本文中の引用にはその巻数とページを（Ⅷ-457）の形で記している。なお，邦訳「トーマス・マン全集」（新潮社）1972年に，引用箇所の訳がある場合，それを借用している。
(5) Hans Wysling: Thomas Mann heute. A. Franke AG Verlag Bern, 1976, S. 45.
(6) Ebd.
(7) Ebd.
(8) Ebd.
(9) Guido Stein: Thomas Mann, Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull: Künstler u. Komediant. Paderborn;

München; Wien; Zürich: Schöningh, 1984, S. 73.
(10) Ebd., S. 75.
(11) Ebd., S. 77.
(12) Thomas Mann: Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull. 1988 R. Oldenbourg Verlag GmbH, München, S. 67.
(13) Ebd.
(14) Hans Wysling: Thomas Mann heute. A. Franke AG Verlag Bern, 1976, S. 62, S. 21.